提言」は信濃川と円山川の堤防で囲まれた集落を例として提示したうえで，日本各地に分布する類似集落の総称を輪中集落とするより，“囲堤集落”と表現するほうが妥当である，との提言をおこなっている．たしかに“輪中”という用語は固有名詞か普通名詞かを決っしがたい面を含んでいることを考えれば，各研究者によって真剣に討議されるべきであろう．

西田彦一「入会林野の解体過程に関する地理学的一考察」は南山城の入会山が解体されていく過程と林野開発による利用形態の変遷を把握したもので昨今の住宅団地開発にもつながる今日的意義をも有している．つづく有薗正一郎「農書『耕稼春秋』にみる金沢平野の水田耕作法とその地域性」と松山利夫「『秋山記行』にみる文化要素とその組み合わせ」は，いずれも近世の農書や記録による考察であるが，どちらかといえば農学あるいは文化地理の色彩が強く，一般的には歴史地理学分野に分類されにくいものである．本論文集は必ずしも分野別に区分することを明示しているわけではないが，しかし一応の区分はあるようでもあり，その点からすればこの2編の配列については若干の異和感が生じる．（もちろん，これは単に配列上の疑問であるにすぎないが．）

赤阪晋「水利開発と農業景観の変化」は亀岡盆地の扇状地をフィールドとして，近世の用水と土地利用の変化を刻明に調査したもの．富岡儀八「内陸住民の購買圏決定における交通条件」は近世において内陸住民が塩の購買先を選択する際の主要因たる交通条件（距離・傾斜さらに塩の価格なども含めて）を考察したもの．加藤瑛二「瀬戸山離散説と陶業集落の立地」は応仁・文明の乱によって瀬戸の工人が美濃に移住したとする瀬戸山離散説を検討したうえで，近世の各陶業集落の成立・立地を論じたもの．

以上が，いちおう歴史地理分野として分類されている（と考えられる）19編であるが，他にも日下雅義「『狭山池』近傍の地形環境と湖岸の変遷史」や原秀禎「古墳の立地に関する基礎的研究(1)」のように，歴史地理にとって大いに参考となる論文も収録されている．

先に述べたように，この種の論文集を評価することは，きわめて困難でありかつまた，それほど大きな意義をもつものでもない．それは収録されている各論文が，それぞれ独立して1人歩きをしているからでもある．

しかし総体的にいえば，この論文集において谷岡地理学の広さと緻密さがみごとに具現化している，といいうるのではあるまいか，そしてこの傾向は，とりわけ先に紹介した歴史地理分野において，いっそう強く感じられるように思う．すべての論文がきわめて高い学術的水準にある，というような意図が評者にあるわけではない．誤解を恐れず率直にいうならば，多くは各執筆者の研究の延長線上にあるものであり，驚嘆するほどの新しい視点が提示されているものはごく少ない．ところが各論文のタイトルが示す簡潔さと具体的な明解さによっても容易に理解できるように，その全てが精密なフィールド調査に立脚した堅実無比なものであることは誰しもが異論のないところであろう．もっともこの堅実さのゆえに，たとえば本論文集に歴史地理学における地表空間組織を理論的に思索した論文が見当らないという不満も生じてくるのではあろうが，しかしそれにもまして大地に根ざした堅牢さを高く評価すべきではあるまいか．スマートな抽象的理論が大した反省もなしに何故か賢明であるかのように受け容れられやすい風潮は，最近の地理学においても，やはり認められる．そのような中にあって本論文集に見られる，良い意味での泥臭さには，爽快感を感じるのである．立命館大学の地理教室といえば，過去いく人もの著名な歴史地理学者によって培われてきた歴史地理学の伝統を思いうかべるのは，評者1人だけではないであろう．この伝統が今後もますます発展することを祈りたい．（高橋誠一・滋賀大）

藤岡謙二郎・山崎謹哉・足利健亮編　日本歴史地理用語辞典：柏書房，1981年，A5判　615頁，9,800円

このたび，初の歴史地理学専門の辞典が刊行されたことは，斯学の発展にとって，誠に喜びにたえない．およそ，学術用語の定義・統一は，当該学問の進展の上で，その基盤ともいえる事柄である．したがって，本学会の創設期以降，斯学研究者の間では，機会あるごとに，用語の定義・統一に関する論議が起こっていた．また，歴史地理学研究の特異性に関心をもつ隣接科学研究者の間からも，歴史地理学用語解説への要望が高まっていた．本辞典は，こうした長い間の事情を背景にして誕生したものであろう．

2,000を越える項目について，斯学の先端をいく120余名の先生方などが，執筆されている．とりわ

け，解説が平易であるほか，参考文献も明示されていて，入門者に対しても，きわめて親切に叙述されている．

1つの項目を読みながら，参考項目を丹念に探ってみると，歴史地理学の研究成果が，読者の脳裏に刻まれてくる．それぞれの項目について，日本における各地の呼称例を詳細にあげているのは，「歴史地理学ならでは」の感をいだかせる長所であろう．この地方ごとの呼称については，従来，研究者が銘々に用語を使用していたために，多少の混乱を来たしていた側面があったのにかんがみ，きわめて有意義である．これは，啓蒙的な役割りを果たすと共に，研究者用の辞典としての特色をも生み出している．

自然地理的な項目の設定とその解説は，ややもすると史学研究者の間に，自然環境に関する基礎的な知識を欠いている実状に対して啓蒙的である．また，「あがる・さがる」「かみがた」「関西」「関東」などの例にみるように，通俗的な用語をも，項目として選択しているのは，歴史地理学的な興味と関心を一般読者に与えて妙である．

執筆者を，地理学分野にとどめず，他の分野の人々にまで広げている点は，本辞典の効果を引き立たせている．学術的研究の必要性を感じながらも，狭い分野にとどまりがちな私などは，大いに利用させていただける．浅学な私は，おびただしい論文出版の波に飲まれて，それぞれの論文の歴史地理学的な意義づけを十分に果たし得ないという悩みを常にもっているので，この種のまとまった解説は，執筆者の研究意図を汲みとらせてくれて，嬉ばしい．

日本列島の開発史が，そのまま，歴史科学的研究の量に投影され，おのずから，西日本の事例が多く記述されているのは当然であるが，このことは，同時に，東日本における歴史地理学的研究の余地が大きいことを，物語っている．東日本における実証的研究と，既往の西日本における研究成果を対象しながら，日本の特質を解明する意欲を湧かせてくれるのである．

同様にして，時代的にみても，近・現代よりも，それ以前の研究成果に重点が置かれて，記述されている．たとえば，「日本国有鉄道」「専売制度」などの項目はあっても，「日本銀行」の項目がなかったり，各種の税制・課税については，かなり網羅的ではあるものの，「所得税」，「営業税」などに関する項目に欠けている．これらの点は，近代以降の歴史地理学的研究が進展するにつれて，増訂されることを期待する．

次に，歴史地理学の普及という観点からすると，編集技術上の問題はあろうが，本辞典に出てくる地名を記載した地図を，最後尾に付図としてつけてはいかがかという蛇足を加えさせていただく．なお，ぼう大な項目数を限られた紙面でこなしたために，挿入の図が小さ過ぎるという点もみうけられる．そして，多少のミスプリント，文中の※印の不足などはあるが，これらのことは，冒頭に述べたような，この種の辞典の嚆矢（こうし）としての価値を減ずるものではない．不肖を顧みず，つたない紹介を試みたことを，執筆者諸氏に詫びる次第である．

（城西大学・田村正夫）